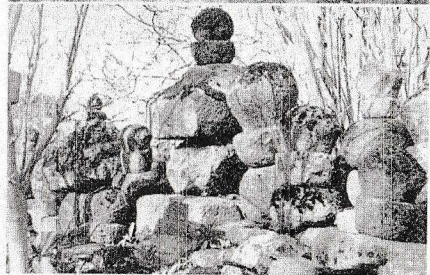
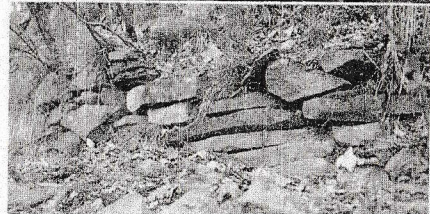
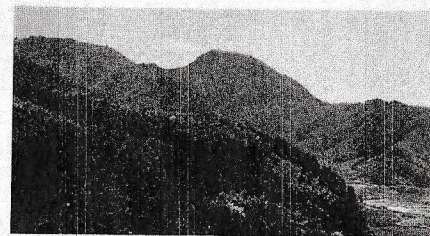


尼巖城 140

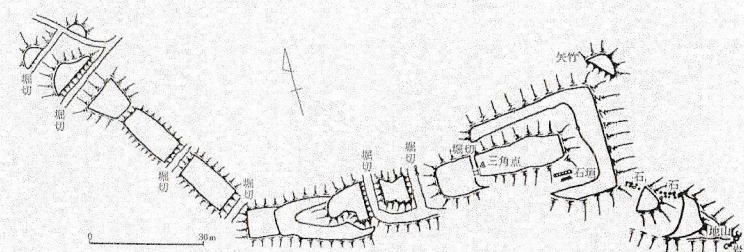


57 尼巖城遠景
58 尼巖城本郭の石積み
59 東条氏の墓と称される五輪塔跡

①長野市松代町東田郷・東条村 ②御膳所・東条城 ③東条氏墓 ④山城 ⑤堀切・井戸跡 ⑥長約二〇m、幅七〇m、比高四二〇m ⑦二〇m×一五〇m ⑧二〇m×一五〇m ⑨二〇m×一五〇m ⑩二〇m×一五〇m ⑪二〇m×一五〇m ⑫二〇m×一五〇m ⑬二〇m×一五〇m ⑭二〇m×一五〇m ⑮二〇m×一五〇m ⑯二〇m×一五〇m ⑰二〇m×一五〇m ⑱二〇m×一五〇m ⑲二〇m×一五〇m ⑳二〇m×一五〇m ㉑二〇m×一五〇m ㉒二〇m×一五〇m ㉓二〇m×一五〇m ㉔二〇m×一五〇m ㉕二〇m×一五〇m ㉖二〇m×一五〇m ㉗二〇m×一五〇m ㉘二〇m×一五〇m ㉙二〇m×一五〇m ㉚二〇m×一五〇m ㉛二〇m×一五〇m ㉜二〇m×一五〇m ㉝二〇m×一五〇m ㉞二〇m×一五〇m ㉟二〇m×一五〇m ㊱二〇m×一五〇m ㊲二〇m×一五〇m ㊳二〇m×一五〇m ㊴二〇m×一五〇m ㊵二〇m×一五〇m ㊶二〇m×一五〇m ㊷二〇m×一五〇m ㊸二〇m×一五〇m ㊹二〇m×一五〇m ㊺二〇m×一五〇m ㊻二〇m×一五〇m ㊼二〇m×一五〇m ㊽二〇m×一五〇m ㊾二〇m×一五〇m ㊿二〇m×一五〇m

尼巖城は金井山・寺尾両城を見下ろす尼巖山にある。古くは尼巖・金井山・寺尾の三城は一体のもので、尼巖城は諸城として用いられたと思われる。この城からは善光寺平はもうろく、小県郡境まで見通すことができ、見張りには最適な場所である。山麓には古くからの地を通って小県郡へ抜ける地蔵峠道があったことが知られ、日蓮上人が佐渡流罪および教免の折に通ったという話も伝えられている。したがって尼巖城はこの道を調するためのものと考えられることもできる。加えて、尼巖は北を除く周囲に二段にわたって急崖がめぐっている。

天険の地で、攻めるに難く、守るに易く、諸城に連なっている。ところで、尼巖城は東条氏の要害と伝えられているが、金井山・寺尾両城は寺尾氏のものであったという。この事実を、三城一体の考え方にはそぐわない。しかし、『諏訪御符札之古書』の長禄四年(寛正元、一四六〇)の項に、東条遠江守が代官を置いてこの地の英多庄中条を知行していることが記されている。また、その後の寛正六年(一四六五)以降に寺尾氏の名が



60 尼巖城要図

出てきて、なんらかの変動があったことを示している。両氏の間には相対立するものがあつたらしく、百年を経ずして行なわれた天文十九年(一五五〇)の武田晴信(信玄)の戸石攻めに際し、寺尾氏は村上義清に叛旗を翻した。しかし東条氏がこれを拒んだことは、のちに晴信が真田正徳宛の書状で、尼巖城を片時も早く落とすよう催促している事実からも知ることができる。落城後、東条氏は越後に走り、晴信は同様の普請を西条氏に命じている。また、天正年間(一五七三―一五九二)に上杉景勝の勢力がこの地に及ぶと、同族を田城主の東条遠江守僧広に守らせている。海岸外郭城としての役割をもたせていたのである。

山頂南端に幅八m、長さ三三mの本郭と、それを取り巻く腰郭があり、本郭上に石組で囲った井戸状のものが現存しているが、なまの遺構かは不明である。本郭西に浅い堀切を隔てて一〇m四方の二の郭がある。その南東隅は鳥の嘴状のいわゆる出隅であり、本郭との堀切内に井戸跡が残っている。二の郭西に深さ四・五mの堀切を置き、不整形の三の郭と堀切があるが、両者の堀切は腰郭に連続している。四の郭は東の堀切側を土塁状に盛り上げ、傾斜気味の五の郭に続く。山の背はこれ以後、北寄りになるが、堀切の後ろに長方形の郭が三つ連続し、深さ五mの大堀切に達する。そのあと半月形の郭の下に堀切があるが、この堀切と大堀切とは堀の部分で略同となつてつながつている。つまり、この城の大手は北西である。

一方、本郭南西と腰郭の中間に高さ一m、長さ四mの平石横組みの石垣があり、その下に幅一mの大走り状の平坦面を置き、さらに石垣がある。かつてはこのような石積み本郭の周囲にあつたのか、それとも櫓手との連絡用の通路跡だったのかは不明である。尾根が続く南西に半月形の段郭が二個あり、その法面の北辺に平石が置かれていたように見受けられる。一〇mほど地山を下ると、大きな岩に達するが、そこは断崖の先端となつていて、見晴らしがよい。また腰郭北東にも土塁状の施設を配置し、矢竹が群生している。

尼巖城の要害、例えば各郭の隅や縁には、適宜、大石を置くなど、しっかりとした築造であるが、これだけ標高の高い山に、このような厳重な構築がなされているのは珍しいことといわねばならない。恐らく東戦の結果、このような堅固なものになったのであろう。落城後は武田方によって手を加えられているが、それがどの程度のものであるかは後述に待たたい。なお、大手・櫓手は共

に登路が急峻なため、馬などとても使用できそうにない。

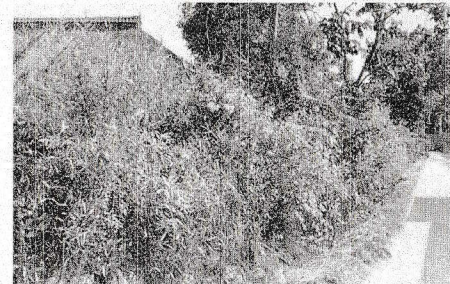
東条氏の居館は、県宝「更玉石」のある玉依比売命神社前にあつて「日の丸」といわれ、土塁などが残存したと伝えられるが、いまは跡形もなく、般若寺の東条氏墓地と称する所に古式の五輪塔が多数残されている。

内後館 147

①長野市中島町長田旧東条氏居館 ②御膳所 ③室町時代末期 ④小田切氏 ⑤堀切 ⑥二〇m×一五〇m ⑦二〇m×一五〇m ⑧二〇m×一五〇m ⑨二〇m×一五〇m ⑩二〇m×一五〇m ⑪二〇m×一五〇m ⑫二〇m×一五〇m ⑬二〇m×一五〇m ⑭二〇m×一五〇m ⑮二〇m×一五〇m ⑯二〇m×一五〇m ⑰二〇m×一五〇m ⑱二〇m×一五〇m ⑲二〇m×一五〇m ⑳二〇m×一五〇m ㉑二〇m×一五〇m ㉒二〇m×一五〇m ㉓二〇m×一五〇m ㉔二〇m×一五〇m ㉕二〇m×一五〇m ㉖二〇m×一五〇m ㉗二〇m×一五〇m ㉘二〇m×一五〇m ㉙二〇m×一五〇m ㉚二〇m×一五〇m ㉛二〇m×一五〇m ㉜二〇m×一五〇m ㉝二〇m×一五〇m ㉞二〇m×一五〇m ㉟二〇m×一五〇m ㊱二〇m×一五〇m ㊲二〇m×一五〇m ㊳二〇m×一五〇m ㊴二〇m×一五〇m ㊵二〇m×一五〇m ㊶二〇m×一五〇m ㊷二〇m×一五〇m ㊸二〇m×一五〇m ㊹二〇m×一五〇m ㊺二〇m×一五〇m ㊻二〇m×一五〇m ㊼二〇m×一五〇m ㊽二〇m×一五〇m ㊾二〇m×一五〇m ㊿二〇m×一五〇m

内後館は長野市川中島の内後にある。山間を流れてきた犀川は、内後の西一kmの地点で谷から離れて善光寺平に出る。内後はその右岸にあり、対岸は小市で、慶長年間(一五九六―一六一五)の北国街道修修で定められた丹波島渡りも古くからの渡河地であった。つまり、延喜の官道の道筋にあった渡と考えると、小市の渡(小松原の渡)と呼ばれていた。そして、ここからは善光寺・腰郭方面へはもちろんだ、大町・戸隠・松代方面へも道は通じていた。いわば、ここは扇状地の要ともいべき地であつて、交通上、用水上きわめて重要な地であった。

小田切氏は海野氏の分派で、鎌倉時代に佐久から水内郡に移ったとされている。



61 内後館 堀と基跡